

5

高齢者と障害者が支え合う “共生型”の福祉事業モデル

Point > 取組のポイント

[ヒト]

困っている人のために、
事業を起こしたい

[着眼点]

「障害福祉×高齢福祉」
の新たな事業モデル

[連携・協働]

専門家の知見を
積極的に活用

[持続性]

福祉事業の最先端
モデルを目指して

Area > エリア

宮城県石巻市

Player > 取組主体

愛さんさんグループ

Project > 取組の内容

有料老人ホーム、デイサービス、
宅食サービスなど

Profile > 人物

代表
小尾 勝吉
おび かつよし



神奈川県川崎市出身。東日本大震災のボランティアや起業支援をきっかけに宮城県に移住。塩釜市で2013年、要介護高齢者向け配食サービス「愛さんさん宅食」を創業。2017年2月、高齢者の自立支援、障害者就労支援の拠点となる福祉施設「愛さんさんビレッジ」を石巻市にオープンした。

[ヒト]

困っている人のために、
事業を起こしたい

震災当時、神奈川県に住んでいた愛さんさんグループの代表・小尾勝吉さんは、もともと松下幸之助氏や稲盛和夫氏などの理念型の経営者になることを志していた。その思いを実現しようと、県内で教育訓練関連の会社を創業するつもりで登記の準備まで進めていた。起業の背景にあったのは、「困っている人たちのために事業を起こしたい」という思いだった。

そうした中、2011年3月11日に東日本大震災が発生。石巻みなと小学校近辺にボランティアとして派遣されたことをきっかけに、本格的に復興支援にかかわるようになる。また、NPO法人ETICの人材派遣プログラムで東北の起業家・経営者の支援などを行う一般社団法人MAKOTO(仙台市)に所属し、被災地の経営者や起業支援に携わった。ただ、その現場で様々な事態を目の当たりにした。その1つに、「仮設住宅に住む人に挨拶しても、さっと家の中に引っ込んでしまう人が少なくなかった」ことがあった。

こうした様子を目の当たりにした小尾さんは、「なんとか被災した人たちが外に足を踏み出すきっかけをつくれなにか」と考えるようになる。「人は、働くことを通じて誰かの役に立つという実感を得るはず。それが生きがいにつながるのではないか」と感じ始めたのだ。

被災地は、人口流出などによって高齢化率が他の地域よりも早く進んだ課題先進地だ。実際、震災後に要介護認定者は



配食事業を行っている塩釜市の宅配センター。弁当がずらりと並ぶ。

増加し、それを支える介護職の有効求人倍率も上昇した。一方で、障害者など社会的弱者の働く場所は不足している。障害をもつ人は、特別支援学校を卒業しても3割程度しか一般企業に就職できないといわれていた。

「困っている人たちのために事業を起こすなら、一番困っている被災地に働く場をつくりたい」。深刻な社会課題に直面す



「愛さんさんビレッジ」では定期的な介護技術向上研修を行うなど、専門的な支援が特徴だ。

る被災地こそ創業の地にふさわしいと考え、覚悟を決めて宮城県に移住。その後、様々な事業を展開していくことになる。

[着眼点]

「障害福祉×高齢福祉」の
新たな事業モデル

2013年、最初に手がけた事業は要介護高齢者向け配食サービス「愛さんさん宅食」だった。創業の地に選んだ塩釜市は、被災地沿岸部の中で一人暮らし高齢化率が最も高いにもかかわらず、仙台市ならほぼ毎日ある配食補助が週1回のみと、行政支援が行き届いておらず、また、民間の宅食事業者もいなかった。

愛さんさんグループ(宮城県)は、2013年から高齢者向けの配食サービス、2017年からはリハビリ型有料老人ホームや、軽度の障害者を介護職員に育成する事業などを行う共生型複合施設「愛さんさんビレッジ」を運営。障害福祉と高齢福祉を掛け合わせた新しいビジネスモデルの構築を目指している。

最初のスタッフは、小尾さん夫婦の2人だけ。売上は月数万円からのスタートだった。しばらくして、新たなスタッフを2名採用。配達や盛り付けをしてもらった。その後、家が全壊した30代の男性を初の社員として迎えた。社会的弱者と言われる障害者やシングルマザーを積極的に採用し、塩釜市のほかに石巻市や東松島市、多賀城市などでも事業を展開。顧客



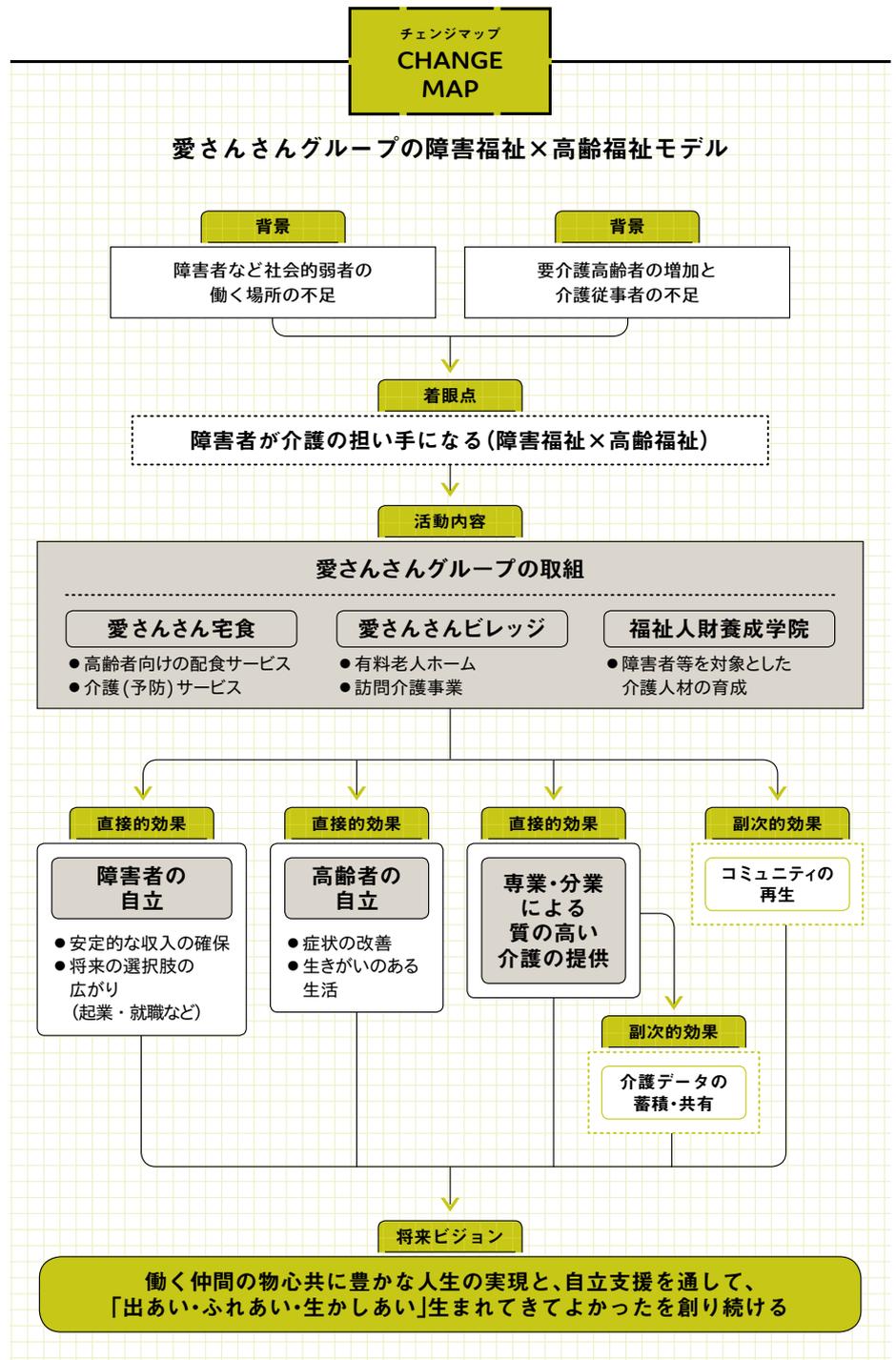
の役割を担うというものだ。薬を飲んだか、ストーブが空焚きになっていないか。そんな風にひと手間をかけることで、単なる「お弁当屋さん」ではなく、地域の福祉の一端を担う立場としても活躍している。こうして配食事業はすっかり軌道に乗ったが、間もなく「これだけでは本質的で

はないのでは」との思いがよぎった。高齢者の本当の幸せを考えるなら、配食に頼るのではなく、自分で食事をつくれるようになる方がいい。同時に、雇用する障害者の仕事の幅を増やしていく必要性も感じていた。そこで小尾さんは、雇用吸収率の高い

は口コミのほか、スタッフ全員で開拓し、個人、法人、市からの受託、福祉施設など、比較的短期間に100件程度にまで拡大した。

愛さんさん宅食の最大の特徴は、顧客の状況に合わせた介護(予防)の視点を取り入れたことだ。糖尿病や腎臓病、高血圧などの食事制限や、噛む力に合わせて一人ひとり食事の内容を変えた専用メニューを用意した。

配食サービスと平行して「ウルトラマンサービス」を展開したことも、他の事業者との差別化につながった。このサービスは、配食の際に食事の準備やゴミ捨てといった3分程度でできる軽作業を無料で行うほか、離れて暮らす家族やケアマネージャーからの要望に応じて、「見守り」





上・震災後なくなってしまった盆踊りの復活を目指して、夏祭りを開催。
下・家族経営からスタートした事業も、大勢のスタッフを抱えるまでに成長した。

福祉事業に目をつけた。そうして2017年に石巻にオープンしたのが、自立支援特化型有料老人ホーム「愛さんさんビレッジ」だ。リハビリに力を入れた老人ホームである点に加え、軽度の障害者をスタッフとして雇い入れ、介護人材の教育プログラムも設けるなど、共生型の複合施設とした。

一般に、障害者福祉と高齢者福祉の両事業は、制度の壁もあり、一緒に行うのは難しいと考えられてきた。だが、介護現場にまつわる3K(きつい、汚い、危険)のイメージを払拭したいと考える小尾さんは、「自立支援介護×障害者就労支援」

という、日本でもまれな取り組みを通じて、新しい仕組みを実現している。

多くの介護施設では、レスパイト(お世話型)の介護をすることがほとんどだが、「愛さんさんビレッジ」の基本精神は、入所者の意欲や活力を取り戻すことにある。そのユニークさは、入所の際に「夢」を聞く習慣にも表れている。リハビリをして入所時より元気になれることを前提に、どんな夢を叶えたいのかを聞いているのだ。

それを実現するため、手厚い介護の提供やリハビリだけではなく、科学的な研究に基づいたプログラムで、体力の回復を目指す手法が用いられている。一人ひとりの水分摂取量や排せつ量、食事の食べ残し、運動量、BMI(肥満度を表す指数)などを毎日計測するという徹底ぶりだ。最新のリハビリ機器も取り入れている。おかげで、多くの入居者の症状は改善する。例えば、妄想性障害の精神疾患があり、一生要介護だろうと思われていた人でも、入所後4カ月ほどで妄想がなくなった。「もう一度、魚釣りに出かけたい」という希望が叶いそうな状況まで改善しているという。

一方、「愛さんさんビレッジ」では、施設内に障害者や難病の人向けに介護職

員の資格を取得できる福祉人材養成学院も運営している。この介護人材育成プログラムを通じて介護職員初任者研修を取得した人も出てきた。障害者の雇用支援と介護現場の人手不足解消。これこそ、「障害福祉」と「高齢福祉」を両立させる仕組みの一端だ。

[連携・協働]

専門家の知見を積極的に活用

こうした成果を上げるため、専門知識をもつ外部組織との積極的な連携も目立つ。配食サービス事業では、利用する高齢者などの病気に対応したメニューづくりで、大手の調理センターと提携。また「愛さんさんビレッジ」でも、高齢者自立支援学会などと情報交換し、入所者一人ひとりに合わせて科学的な根拠に基づいたリハビリ計画を立て取り組んでいるほか、投薬量などを計画的に決めるにあたっては、アドバイザーとしてリハビリテーション部門をもつ石巻市内の病院と連携している。

また、グループホーム内では、いわば相互的な連携・協働が日常的に行われているのも特徴だ。障害者や高齢者が「客」にならないよう、施設内で衛生委員や花壇委員、畑委員、美化委員などそれぞれ役割を担ってもらい、できる範囲でどんどん動いてもらっている。特に軽度の障害者には、作業書の作成など事務的な作業と向き合う仕事を担ってもらうことが多い。だが、人と向き合う仕事を通して、「ありがとう」と言われる経験が大事だと小尾さんは考えている。

ほかの多くの施設では、掃除、洗濯、調理、配膳などの間接業務までを介護職員が行っているが、「愛さんさんビレッジ」ではその多くを障害者が担っている。そのため、介護職員がリハビリやケアという「本業」に費やせる時間が多く取れ、余計に成果が上がりやすくなっているという。

一方、資金調達や経営面では、一般社団法人MAKOTOや、学校法人グロービス経営大学院の流れを組む一般財団法人KIBOWの支援などを受けており、両

法人からは取締役やアドバイザーとして人材も迎え入れている。ほかにも、大手企業のCSRや研修の一環で社員を派遣してもらうなど活発な交流を行なっている。

[連携・協働]

福祉事業の最先端モデルを目指して

高齢者と障害者が一つ屋根の下で協力し合う「愛さんさんビレッジ」。「両者が持ちつ持たれつ支え合うことで、双方の自立支援を促す流れが生まれている」と小尾さんは手応えを口にする。

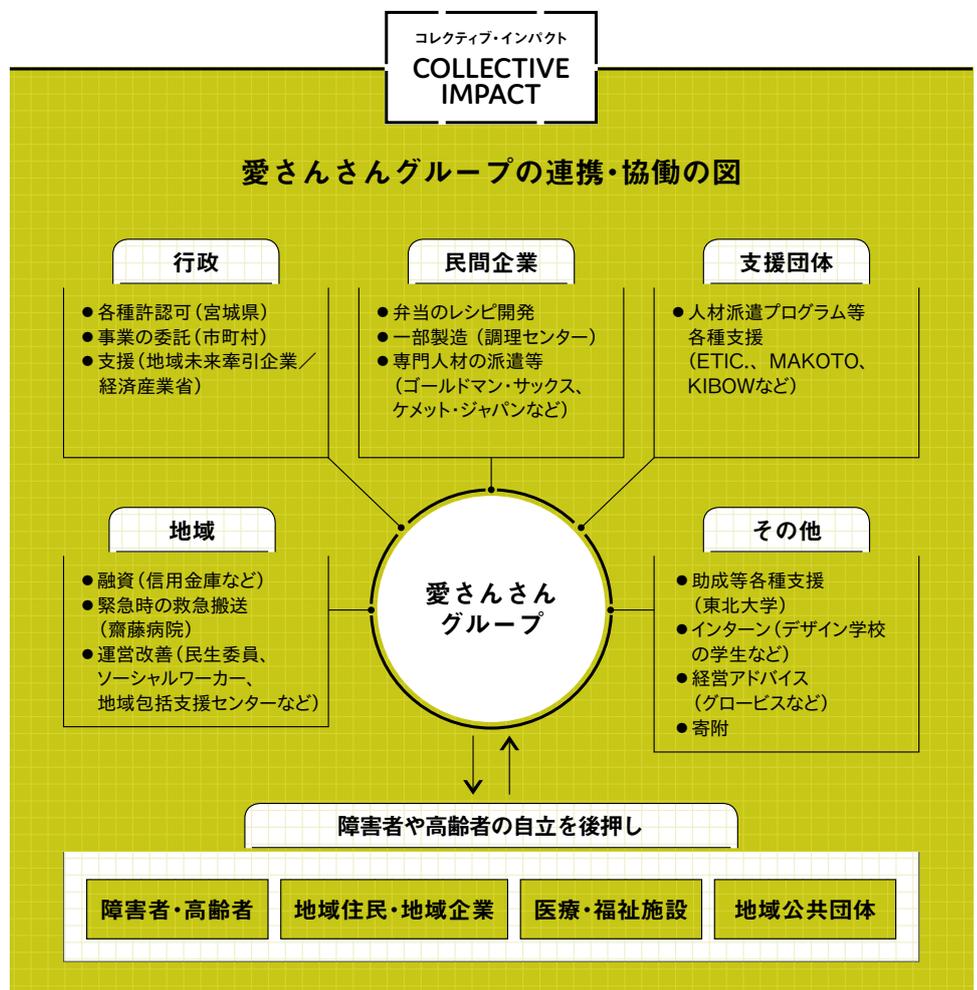
そんな小尾さんが描く将来ビジョンは、全ての人々が隔たりなく出あい、ふれあい、生かしあうことにより、好循環が生まれる社会づくりだ。そのためにも、後継者育成が大きな課題の1つになりそうだ。小尾さんが自分自身ですべてをマネジメントするのではなく、人を介して事業を回す時期を迎えつつあると考えている。

「多くの人たちに支えられてここまでやってこられた。自分の代で事業を終わらせるつもりはない。100年続くような企業として理念経営を継続し、社会に浸透させていく。この世の中から、社会的弱者という言葉が死語になる世界を目指す」と語る小尾さん。最初は家族経営から始め、その後徐々に社員を迎え入れ、創業3年目あたりからは幹部と呼ばれる社員が育ちつつある。愛さんさんグループでは、後継者育成を目指し、2020年からは新卒採用にも踏み切る予定で準備を進めている。同時に、障害者など社会的弱者の就労を2020年までに計100人生

み出す目標もある。

そうした中、今後さらに大きな成果を上げるため、「愛さんさんビレッジ」の敷地内にもう1棟、3階建ての施設をつくる第2期工事を2019年にも始める予定だ。2棟の建物を囲むように植樹も行い、近い将来には森に囲まれた、文字通り「ビレッジ」のような環境をつくるのが愛さんさんグループの当面の目標だ。

「愛さんさんビレッジ」の理想の姿を完成させるには、自前の産業を生み出したという願いもある。「障害者や高齢者が見つけた商品が、日本や世界で売れる。そういう状態をつくりたい。そして、そのノウハウが福祉事業の最先端モデルとして全国へ広がればうれしい」と希望は膨らむ。



「畑委員」として自家菜園での畑仕事に精を出す入所者も。



愛さんさんビレッジ株式会社

所在地 > 〒986-0856
宮城県石巻市大街道南4丁目6-20

TEL > 0225-90-4213

HP > <http://aisansan.info>

主な事業内容 > 有料老人ホーム事業、リハビリ特化型デイサービス、高齢者向け宅食サービス事業、「福祉人材養成学院」の運営など

本事例の問い合わせ先